

柏木教会月報

7月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 www.church.ne.jp/kashiwagi/

我信ず、信なき我を助けたまえ

マルコによる福音書 九章一四～二九節

牧師 富永 憲司

その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしを、お助けください」

(二四節)

「信じます。信仰のないわたしを、お助けください」

(二四節)

(二四節)とは、もしこれが信仰の告白と言うのならば、何と不思議な告白でしようか。第一、「信仰のないわたし」が、どうして「信じます」と言えるのでしようか。彼自身の告白の論理的矛盾、自家撞着を問われるなら、この父親にはきっとうまく答える術がなかつたことでしょう。しかし、考えてみると、わたしたち自身もまた、自分の側の確かな認識や迷いなき信仰を問われるなら、まさに「信仰のないわたし」としか言いようのないところがあるのではないでしようか。それでもなお、「では、あなたは信じていないのか」とと言われれば、「いや、信じています」と答えることでしょう。

この父親にしろ、わたしたちにしろ、自分自身の側には不確かさしかありませんが、主イエスは確かに、信頼できたのです。そのように、まさに信仰とは、自分自身ではなく、あくまでもわたしの外に立ち、わたしに迫つ

てくださる主イエスに信頼を寄せることがあります。この父親は、初め、主イエスに、「おきになるなら、わたしもをおれんでお助けください」(二二二節)と申しました。「おきになるなら」とは、「もしかあなたに何か可能ならば」ということです。この言葉の裏には父親の長い苦しみと失望があります。今、子どものことで一縷の望みをもつて弟子たちに期待しましたが無駄でした。主イエスでもだめかもしれない、父親はそう考え始めています。また失望させられるのが恐ろしいから、今回もだめなときのことを考えているのです。

そのとき、主イエスは父親に言わされました。「できれば、と言ふが、信じる者には、何でもできる」(二三三節)。神には何でもできないことはないではないか、あなたはそれを信じるか、とおっしゃったのです。

父親は、主イエスのお言葉に迫られて、「神には何でもできる」と信じました。信じきれない自分がいることも事実そのままに認めながら、しかも、そのような不信仰な者も助けてくださる神がいてくださることを信じたのです。主イエスはこの父親の叫びを聞いて、父親も、子どもも救つてくださいました。

ここで見つめられている信仰が大事です。信仰とは、自分自身の中に、疑いや迷いが何一つない状態になることではありません。むしろ、自分には疑いの嵐が吹き荒れ、迷いの闇が覆っているが、それにも拘らず、自分前に立ちつづけてくださる主イエスを認め、その目を自分自身から、主イエスへと転じることです。そして、何でもできないことはない神に、信頼しつつ、すべてを期待して歩むこと、ここにまことの信仰があります。